

談義所遍藏聖教について

— 延慶本『平家物語』の四周・補遺 —

はじめに — 元応寺・金山(仙)寺・善法寺 —

近年における諸社寺襲藏聖教類の調査の著しい進展並びに録公開などにともない、延慶本『平家物語』の四周に意外な新知見が次々と齎され、豊饒な沃野が拓けていることを改めて痛感したのもここ二、三年のことである。観衆団の活動については贅言するまでもないが、東大寺戒院系の律僧の系譜に鏤められた絢爛ともいふべき説話・曲類の種々相は、鎌倉期(院政期へ連なる)における作相互の連関の全く新しい「組み替え」を予感させるものあり、近年の泉涌寺系律などのへの新たな思想史・仏教側からの論究とも緊密に連関・呼応してくるのである。田文衛氏が『王朝の明暗』において、既に紹介してい

牧 野 和 夫

る記事がある。

『薩戒記』応永三十二年閏六月十五日条に

「癸未、天晴、申刻許左頭中将隆夏朝臣來臨、…(略)…中将談曰、善勝寺者在法勝寺西、件寺家保卿建立也、有六口供僧、承仕・花摘等干今不絶、而於寺者已炎上了、不及修造、寺跡菜園」等彼供僧等所知行也、仍如形勤行等於金山寺行之、件金山寺家成卿建立也、干今在之、雲居寺北也、彼寺無供僧、元応寺僧等行仏事」『大日本古記録 薩戒記』(2003 岩波書店)

この記事から知られるのは、善勝寺には六人の供僧が置かれていたが、寺が炎上した後も彼等は寺の敷地や菜園(寺院と菜園などについては、参考文献として井原今朝男氏「中世寺院の国際性と外交僧」『増補中世寺院と民衆』

平成21・1 臨川書店」を知行していること、但し、善勝寺の仏事は金仙院で行われていること、金仙院には、現在、供僧がいないので元応寺の僧が日常の仏事を行っていること、などである。善勝寺炎上後、勤行などは金山寺(院)で行われた。金山寺には供僧なく元応寺の僧侶が仏事を執り行なっていたというが、応永三十二年頃の元応寺の住持は、第七代慈昭和尙正真で、『元応寺年中行事』の撰者である(同書の紹介は牧野『日本中世の説話・書物のネットワーク』(2009・12 和泉書院)頁16)。「光宗―運海―宗知―正真」と次第する『三国伝記』の世界が、東大寺戒壇院系の律僧の拠点寺院に、ひそかに、連続していたことは明瞭である(ことの次いでに一言する。『三国伝記』撰者玄棟と同名の僧侶が身延文庫蔵弘治二年頃写『逆修講法』一帖など複数の聖教の書写與書に署名している。その伝領墨識語などの問題については別稿に譲る)。

元応寺の心空が石清水八幡善法寺にもゆかりを持つ学僧で、その門下の鎮増(『鎮増私記』の撰者、田中貴子氏『室町お坊さん物語』(1999・6 講談社)参照)が元応寺十七代の住持を勤めていることに不自然な点はなく、元応寺・金仙院(金山寺)・石清水善法寺を結ぶネットワークは、鎌倉期の円照門下の拠点寺院のネットワークに、ゆるやかに、重なるのである。

凝然撰『東大寺円照上人行状』(昭和五二・一〇二三刊

東大寺図書館)巻上に、「洛東鷲尾^{法名号}金山院」とあり、『行状』

には金山(仙)院を「鷲尾」と称する例は多い。正元々年四条隆親の時、東大寺戒壇院円照上人へ施入され、円照も金仙院で没し、凝然も師の後を襲って同院に埋葬されている。『行状』に頻出する寺院名で、最も頻度の高いもののひとつ、東大寺戒壇院系律の京洛における最大の拠点であった金山(仙)寺は、光宗による再興・運海などの滞在を経て応永二十三年頃には供僧もなく元応寺の供僧の許で仏事運営がなされていたことになる。翻って建礼門院の「法性寺」にて往生、納骨・墓どころを「鷲尾」とする延慶本に目を転ずるならば、正元々年以前・以降は読み本系の本文の生成期にあたる。また、延慶年間を挟む頃から応永年間に至る間幾次にもわたる加除の積疊累増が根来寺においてなされたと予想されるとき、正元々年以降の東大寺戒壇院系律(白毫院(太子堂)における天台穴太流澄豪との緊密な交渉)の差配下に置かれた「鷲尾金山院」と東大寺戒壇院系律僧忍空・円海、同じく思融等の行状(根来寺の順継・良殿との緊密な交渉)を考慮すべきであり、延慶本独自記事に対する新たな視界を開くことになる。台密の穴太流光宗・運海の拠点寺院のひとつ「近江阿弥陀寺」の登蓮説話や思融の拠点寺院家原寺と結ぶ「粉河寺」縁起(東大寺系

資料との問題）や、延慶本独自の八幡関連の記事（律系の金沢文庫蔵「八幡」関連資料との酷似乃至は同傾向を認めることができる。長門本の同系資料の取り込みとは、経路を異にするものであろう。参考文献として鶴巻由美氏「延慶本平家物語」の神功皇后譚『国語国文』81巻9号2012・9）などが改めて留意されるべきであらう。

一、「叡憲」といわれる叡山版

華蔵院本『山家要略記』奥書（『神道大系 天台神道（下）』）により、天台の記家の名匠義源が正和四年に「当流記録中秘口決」一卷を秀範大徳に授与した事実を紹介した。しかも「先賢之嚴命」に違うにも拘らず、と記している点（牧野「本地物の四周」『佛教文学』27号 平成152003・3）に留意した上で、ここに認められる「秀範大徳」が、神宮文庫蔵『本朝諸社壇』奥の「秀範口」の「秀範」と同一人物と考えることができるならば、という仮定条件を附して言及した。さらに徳治三年（1308）閏8・25に「秀範、『両含抄』書写」の事実を、嘉暦二年（1327）6・10にその秀範の本を「連（連）心 書写」の事実をも併せて紹介したのである（牧野「疑経・仮託などの周辺―『舍利要文』・『大乘毘沙門功德経』―」（『実践国文学』60号

2001・10）。この恵檀両流の口伝の書である『両含抄』の近くには麗気記や空海などと関わる文辞句のあることの指摘もあるのである（大久保良順氏「天台の神本仏迹説資料」（『神道大系』月報114天台神道（下） 平成5・5）。また、本文中に「武州了性大徳相伝」ともあり（了性大徳）はあるいは了性房良尊か、「恵尋 真尊」の相承も律関連で考えられそうでもある。

義源と秀範との「神道」相承授受にかかわる点で新たに注目すべきことに、「叡憲」なる僧が関与した叡山版の南北朝期の追刻事業がある。この問題については、既に靈山院・清誉といわゆる叡山版（承澄関係）・穴太西山流西山寶菩提院との関連で近く口頭発表予定（延慶本奥書・応永書写『平家物語』四周の書物ネットワーク―東アジアへ（から）の経路―」（軍記・語り物研究会大会シンポジウム「軍記物語とアジアの仏教世界」2011/8・30於鶴見大学）と予告した。ここに「叡憲」という新たな僧をとりあげて身延文庫蔵弘安至貞和二年刊『維摩經疏』八巻の書誌事項について報告するが、先だって「秀範」「叡憲」に関する資料の紹介が必要になろう。既に、「秀範」については贅言を加えることは慎みたいが（思想的な検討については、伊藤聡氏『中世天照大神信仰の研究』や松田淳一氏『神仏と儀礼の中世』参照）、「叡憲」について考える

上でふれざるを得ない僧である。最近の中世神道資料をめぐる領域に展開する「秀範」の位置から入ることにしたい。

「円海―秀範」と相承する「秀範」を軸に「蓮心」と「契弼」を結ぶ神道関連の血脈がある。既に、久保田収氏『中世神道の研究』（1959 皇学館大学出版部刊）が高野山三宝山蔵高野山大学図書館寄託『四神道書伊勢流』（忤性）に拠る血脈として紹介している。

〔略〕房海 実印 浄真 覚賢 頼明 覚昨 実尊 性遍
円海 秀範 聖海 蓮心 融尊 契弼 空廬（傍点私）

と連なる血脈である。更に「秀範」「蓮心」「契弼」と相承の跡を辿ることのできる資料が神宮文庫蔵『神道切紙』第九切紙「本朝諸社壇」の奥識語である。

「秀範口授 蓮心記之 文和三年甲午三十一 契弼書入 良重示」

とある。伊藤正義氏「久世戸縁起―謡曲「久世戸」の背景―」（『文学史研究』）がはじめて紹介し、牧野「『日本記抄』翻印・略解」（『実践国文学』51号 平成9・3）において「蓮心」を確認した。

ここに、新資料として「國學院大學（宮地直一コレクション）蔵『諸大事』」「神祇灌頂 極秘」に次の血脈が認められる。

「神祇灌頂血脈 極私号 天岩戸大事」
神祇灌頂 極秘 又云 藤家灌頂

印无所不至 言〔ア〕〔バン〕〔ウン〕

印面三穴有 日月星也、此印

（略）

房海 実印 浄真 覚賢 頼明 覚昨 実尊 性遍 円海
秀範 聖海 蓮心 融（尊、脱） 契弼 海賢 叡憲

弘賢 弘印 一暈 月済 惣海 政祝（傍線私）

大東敬明氏「中世神道関係資料としての『諸大事』」（巡礼記研究会 第九回研究集会 平成24・10・13 於神奈川県立金沢文庫）に新資料として紹介されたものであるが、既に大東敬明氏「國學院大學宮地直一コレクションの中世神道関係資料について」（『神道宗教』218号 平成22・4）などに紹介があり、船田淳一氏「死穢と成仏―真言系神道書にみる葬送儀礼―」（『神仏と儀礼の中世』法蔵館 平成23・2）に活用されている。

「秀範」「蓮心」の相承に留意しつつ、今回の扱う「叡憲」に及ぶことにする。

宮地直一コレクション蔵『諸大事』の「諸社口決」奥識語「応長二年二月 日記之 金剛資秀範」の年月日は、「金沢文庫 古文書2844号」により阿部泰郎氏が紹介された素睿写本「諸社口決」（神宮文庫蔵『神道切紙』第五）の伝授識語の末尾に合致する。やや長文の伝授識語と併せて引用する。

「已上、大事・渡天口決、真然僧正、御僧也。尊師、自僧正相傳仍、此密義在小野」。尊念伝之。然、彼流末資信州某、形雖受達磨門下、心常遊神明三摩地。爰、愚賢、去々年夏天、依或人示授、往向彼所、致諮授、之処、敢不預返事。雖然、志念無休、參上及五六月、終至八月、被許上來、大事、……(中略)……為為大事潤色、入袋被持之。予、自幼少、自然崇敬神道。……不慮感得此。但、悉口決也。雖然、恐忽忘故、所令記錄一如件/応長二年二月 日記之(『真福寺善本叢刊 第七卷 中世日本紀集』(一九九九年九月 臨川書店刊)頁530)

とあり、宮地直一コレクション蔵「諸大事」における「金剛資秀範」の位置は、明らかに「応永二年二月 日記之」に係るもので、「諸社口決」は秀範が応長二年(一三二二)二月に「記」したものと判明する。

素睿写本に存するやや長文の識語中の「愚賢」や「予」は秀範の自称と受け取るべきで、「去々年夏天」(一三二〇)に「信州某」の所に赴いて「被許上來ノ大事」たことも秀範の事績であり、「自幼少、自然崇敬神道」との記述も秀範の洩らした回顧の一言なのであった。秀範は初心より「神道」に志を持っていたのである。華藏院本『山家要略記』奥書の「秀範大徳」が「諸社口決」奥識語の「金剛資秀範」

であると仮定するならば、神道家秀範が記家の名匠義源より相承すべく天台神道の秘奥相承に「懇志」を以て臨んだことは想像に難くない。幼少よりの初心を貫いたものと考え、るべきで、神本仏迹を慈遍に先行して受容した中世の神道家として改めて位置付ける必要もあろう。また「尊念伝之」。然、彼流」という尊念の流れは、後述する『受法用心集』に撰者心定の師加茂空觀上人如実が高野の道範から受けた「尊念僧都の流」と同じ流を指すものと思われる。

『諸大事』の「円海 秀範 聖海 蓮心」と次第する血脉相承中の「蓮心」についても既に「偽経・仮託などの周辺」『舍利要文』・『大乘毘沙門功德経』——(『実践国文学』60号 2001・10)で東大寺図書館蔵『傳心記』「先師相承三宝院自流血脈事」を用いて次のように指摘した。

「成賢 深賢 円珠 円塔 性心 本圓」

「円塔」に朱傍書して「蓮心上人/善法寺」とあり、蓮心は八幡善法寺住の円塔に他ならないのである。」

円珠は、思融と号して醍醐寺に住したことも知られる。蓮心が「諸大事」の血脉における円海や秀範、更には思融(円珠)に連なることで、東大寺戒壇院系の円照への緊密な「運動」に係わる遁世上人であったことも知られていたのである。また、「秀範—聖海」の「聖海」は、或は、恵劔の伝授に認められる聖海(秀範も赴いた千葉堀内禅堂の僧)か。

ようやく「叡憲」という新たな僧をとりあげて身延文庫蔵弘安至貞和二年刊『維摩經疏』八巻について論究すべきところであるが、その前にいわゆる叡山版と呼称される天台三大部注疏記の刊行にふれなければならぬ。

ここでは、『法華玄義釈籤』巻八の刊語を例に示す。

「願主 法印権大僧都 承詮

弘安五年壬午十月十八日

結縁短筆 権律師清譽」

とある。願主が承詮で、いわゆる版下を担当したのが清譽ということになる。

『昭和現存天台書籍目録』により、注目すべき僧名を抜書きし担当・役割を明示して一覧する。

承詮― 三大部注疏記の願主

承澄― 『法華玄義』巻一・二版下

宋了一― 『法華玄義』巻六版下、『法華玄義釈籤』

巻十版下、『法華文句』巻三・四版下、『法

華文句記』巻二・四本・七・八本末・九本末・

十版下

親守― 『法華玄義』巻七版下、『法華玄義釈籤』

巻七版下

忠源― 『法華玄義』巻五願主?、『法華玄義釈籤』

巻五願主

大宋人盧四郎― 『法華玄義釈籤』巻六版下

清譽― 『法華玄義釈籤』巻八版下

憲實― 『法華玄義釈籤』巻九版下

親瑜― 『法華文句記』巻六版下

ほか

天台三大部注疏記の刊行は、承詮が弘安二年（1279）から永仁四年（1296）まで十八年をかけて完成させた全六十巻八十帖という一大事業であった。

承澄没年の弘安五年（1282）以降十数年の間、白毫院を軸に活動していた良含・澄豪・遍融の動きは、承澄晩年の頃から弘安八年にかけて天台三大部並注疏記の刊刻事業に願主・本文書写（版下）として集結した学僧などの人脈に連なる点は興味深い。

『法華玄義釈籤』巻八版下を担当した権律師清譽は、東山靈山院（寺）に係わる三井寺の僧かと推定される。『勘仲記』弘安九年（1286）四月十二日条に「……大阿闍梨聖護院宮御参遅々之間（中略）大阿闍梨率伴僧廿口」として列記する僧名に「清譽」があり「権少僧都」とある（丸山陽子氏「三井寺周辺の和歌活動」『明月記研究』12号2010・1）。『門葉記』の「五壇法」（山門三人。寺門一人。東寺一人）の勘例・弘安九年六月十八日条に「寺」の「清譽僧都」「初」とある。承詮についても、『兼仲卿記』紙背

文書建治二年に「御八講」への屈請の僧のひとりとして拾うことができる。

文永頃に「東山靈山院」を拠点に活動していた学僧では三井寺の定円（李銘敬氏『法華経顯応録』をめぐって）『海を渡る天台文化』勉誠出版 2008・12）、小林加代子氏「賢王高倉帝と亡母追善」〈『軍記物語の窓』四集 和泉書院 2012・12〉参照、宋刊本移入なども宋人害進の堂塔などと併せて視野に入れるべきか）が有名である。定円は反御子左派の父真観没後の歌書群を伝領し、東山靈山あたりで素寂（源光行を父、親行を兄）を中心にして書写・校定作業に勤めた実績が近年あきらかになったが（久保田淳氏「法印清誉について」〈『中世の文学』附録22 1994〉、藤本孝一氏「三井寺本—真観本—（三）」〈『冷泉家時雨亭叢書 月報79』2008・2〉）、定円らとともに書写・校定作業に勤しんだ僧として三井寺僧清誉が挙げられている。

承澄・忠源は小川流、親守・清誉は三井寺、憲實は安居院流（三井寺定円と親密）、親瑜は、おそらく「実勝—親瑜—秀範—円海」の系譜に認められる親（信）瑜か、と考えられる（橋本正俊氏「随心院藏『遍口鈔』『遍口鈔口伝』について—付翻刻」〈『随心院聖教と寺院ネットワーク』第二集 2005・3〉）。『遍口鈔口伝』に「信瑜ハ木幡廻心

上人ノ舍弟也。下向^テ関東、隱居」という廻心房真空門下の学僧である。これに『法華文句』巻七版下担当「東寺門流金剛仏子源舜」という東寺門流を加え、その顔ぶれに宋了一・大宋人盧四郎（綱首か、その周辺）という宋人の積極的な参画を認める。さらには、承澄を始め、時忠流などの関係者を複数指摘できる。平時繼、平範賢などであるが、安部雅遠などは当代の名筆との評価の高い人物である。「山上平家絵詞」の成立時期ともからみ興味深い（落合博志氏「鎌倉末期における『平家物語』享受資料の一、二」〈『軍記と語り物』27号 1991〉）、今後の課題である。

承詮は三大部注疏記に止まらず、湛然の著作を刊行する志があったようである。湛然撰『維摩経疏』八巻についても「願主」となつて承詮が既に弘安年間に出版を開始し、巻七の途中まで進めたところで没したため中断していたが、身延文庫藏『維摩経疏』八巻の刊語によって、承詮の遺志を継いだ「叡憲が貞和二年（一三四六）に完成した」と（白石克氏『日本古刊本図録』上 平成7・3刊 慶応義塾図書館）がわかる。

身延文庫藏『維摩経疏』巻七、55丁・裏まで弘安頃の願主承詮の刊、56丁・表から貞和以前南北朝初の叡憲の刊であることが明瞭である。正確に記せば第七冊（巻七）55・ウまでは「弘安期」刊（室町）印、56・オからは、

字様明らかに異なり貞和期の叡憲による追刻であり、「室町」印である。

身延文庫蔵

維摩經略疏 八卷

湛然撰

卷一至七・五五ウ〔弘安頃〕承詮刊〔室町後期〕印、卷七・五六才至九貞和二・四年叡憲刊〔室町後期〕印

仮九冊

簡単な書誌事項を記す。

第一冊（卷一）、前表紙欠、仮表紙〔原見返し〕（26・9×16・4 糎）近代の紙縫り仮綴じ、後表紙は栗皮原表紙。無辺無界、印面高さ、約21・1 糎、每半葉七行々十八字、元は粘葉装（現仮綴じ）両面刷、朱の合符・断句、墨の訓点を附す。

第二冊（卷二至卷九）以降も同様であるが、栗皮原前表紙の中央に打付けに「維摩經略疏第二（〜卷九）」、左端下方に「日朝」といづれも墨書。第三冊（卷三）表紙左端に包背裂（淡縹色絹）の痕跡少々あり。卷五あたりから栗皮原表紙、包背の粘葉装で原装。

卷七末尾題「維摩經略疏卷第七」（96・オ）、96・ウに

「右維摩疏印板者去弘安之比為承詮／法印願主開之第七卷半功未終而入／減自爾以降涼燠多遷梓板不整爰／項年及續補沙汰之刻愁応一谷之衆／命試染数紙の短筆耻貽露点之

拙／遙至星灰之轉而已時也貞和四季戊子／天呂上澣矣／

右筆沙門傳燈大法師位叡憲記

卷八末尾題「維摩經略疏卷第八」（79・オ）、79・ウに

「貞和二季（歲次／乙戌）正月十一日終筆功矣／

傳燈大法師位叡憲書

とある。

この叡憲は義源の弟子で穴太西山流に係る学僧で、西山宝菩提院にゆかりの深いことが知られる。叡憲については、松田宣史氏「叡山文庫蔵『依正秘記』の研究」（『比叡山仏教説話研究―序説―』2003・11 三弥井書店刊）に譲りたい。若干、贅言をするならば、隨心院蔵『法華経音釈』一帖があり、「義源―叡憲」の相承を伝えるものである。詳細は別稿に譲る。

二、越前豊原寺―智満寺・走湯山―

かつて牧野「中世天台談義所の典籍受容に関する考察」（『延暦寺と中世社会』（二〇〇四・六 法蔵館））において駿河智満寺旧蔵典籍類の通蔵の問題を扱ったが、近時、知ることを得た駿河智満寺旧蔵柏原談義所通蔵の聖教を新たに紹介した（「中世寺院資料をめぐる二、三の問題―伝領墨

署名慶舜・泉涌寺版『四分律含注戒本疏行宗記』の底本」
『実践国文学』82号 2012・10。

馬淵和夫氏『影印注釈 悉曇学書選集』第二卷（昭和63・2 勉誠社）に収載された筑波大学図書館現蔵天福二年写『悉曇要決』（十二・1）粘葉四帖であり、卷一奥書に「書本治承五年辛丑二月廿四日越州坂北於豊原寺書之」「天福二年甲午七月十七日智法寺別処於興禅院書了小比丘信毫」、卷二奥書に「天福二年甲午七月廿四日寓走湯寺別処興禅院書了 小比丘信毫」、卷三奥書に「天福二年甲午七月四日於興禅院書了信毫」、卷四奥書に「天福二年甲午八月四日於□□寺別処興禅院書了 仁尊」「書本云治承五年歲次辛丑三月廿六日越州坂北豊原寺修行之書之了」とある。これらの奥書・本奥書から推しうることを前掲小論に次のようにまとめた。

「悉曇関係のこの両書は、正に「走湯」（伊豆）と「智満寺」（私に「満」とよむ）とを結ぶ、天福二年頃の「信豪」「信毫」の手に係るものであり、成菩提院現蔵『蘇悉地对受記』一帖ほかと同一筆者に係る悉曇書群であったことが確認できたのである。「走湯」（伊豆。重書き、下字不明）と「智満寺」（擦りけち）の両寺における相互授受ということで金澤文庫保管『忍空授銀阿状』の「安貞二年七月廿日於伊州走湯山来迎院授与駿州智満寺住僧堯真」と同じ流れが認め

られる。悉曇学の領域を考慮すると承澄、良含（円光上人）、澄豪（さらには岩蔵大円上人が傍系として考慮される）などが「白毫院」「成菩提院」周辺に浮かぶが、思融（円珠）や忍空を介すれば戒壇院・法華寺系とも関連する。今後の課題である。」

旧稿「中世天台談義所の典籍受容に関する考察」のまとめも引いておく。『忍空授銀阿状』一卷一軸の伝授相承血脈の「船形寺住僧覚智々々以於伊州走湯山東明寺授与同山住僧源延々々以安貞二年七月廿日於伊州走湯山来迎院授与駿州智満寺住僧堯真々々以延応二年三月廿日於智満寺授与同寺住僧堯豪々々以建長五年九月朔日於智満寺授与真尊（右傍小字「一蓮上人」）々々以永仁三年十月廿日於四天王寺勝鬘院授与忍空（右傍小字「空智上人」）々々以嘉元二年三月十七日於大和州室生寺授与武川金沢称名寺住僧銀阿」を引き、次のように記した。

「血脈によれば、建長五年（一二五三）、四天王寺勝鬘院の「一蓮上人」真尊が、智満寺において伝授されたもので、永仁三年には、四天王寺で空智上人忍空の手へ授けられたことが判明する。日光輪王寺蔵『十不二門指要鈔』下冊に認められる、正嘉二年（一二五八）「智満寺」における書写が確認でき、その底本には、宝治二年（一二四八）「四天王寺安居僧堂談義之次」校合との識語があり、成菩提院

現藏・旧蔵の両書に共通する智満寺と四天王寺との交渉を辿ることができる。『円照上人行状』によれば、次の記述に遭遇する。「諱忍空、房号ハ空智、駿河ノ国人也。初ハ雖^モ投^ト禪院^一、而由^テ縁^ニ入^ル律^ニ、即勝鬘院ノ円珠・思順、両徳東遊之時、相^ヒ随^テ上洛、(略)」（『円照上人行状』巻中、東大寺図書館、一九七七年、九頁）

四天王寺勝鬘院の円珠・思順が、駿河の国へ下り、「駿河ノ国人」忍空は、両徳に随い上洛したことが知られる。おそらく、建長九年頃の円珠などの智満寺滞在と関わるものであるのが、多くの典籍類もまた、忍空と共に南都へもたらされたものと推測しうるのである。四天王寺と智満寺との組み合わせは、単なる場合とは考え難いものがある。さらに、「智満寺」が「智証」系資料や「十不二門」関連聖教と関わることは、「智満寺」が駿河における重要な天台系寺院であった可能性を秘めている。

旧稿にたびたび記したので省略するが、円照の戒壇院系の寺院をめぐる「動き」、すなわち金山院・東大寺戒壇院・八幡善法寺・法花寺・天王寺勝鬘院などを結ぶ頻繁な僧侶・典籍の往来を台密西山流の澄豪・豪鎮に結び、緊密な相互授受を想定するならば、真言律の忍空・円珠・真尊、円光上人良含が寺戸宝菩提院蔵書形成に多大な影響を及ぼしたことも理解できるのである。」

信毫（豪）と伊豆源延・駿州智満寺を結ぶ教線は、櫛田良洪氏『真言密教成立過程の研究』（昭和39年8月 山喜房仏書林）頁351～357に拾うことのできる「信毫」（駿州智満寺僧と同一僧かどうかは不明、今後の課題である）を介して種々に憶測は可能であるが、資料的な面での欠如は甚だしく全て未詳としておく。既に納富常天氏「三浦義村の迎講と伊豆山源延」（『金沢文庫資料の研究』）の行実一覽にもふれているが、伊豆源延と駿州智満寺を結ぶ資料として『善光寺縁起』（続群書類従 28輯上）「浄蓮上人源延如来奉拝見事」の中に拾う「駿河国智満寺為大曼荼羅供大阿闍梨得輻請渡給」の一節がある。

「夫浄蓮上人。伊豆国人。家伊豆河東走湯山所生也。若年之時依学澄憲住山住侶多年也。止観玄文重稽古。真言秘密。薰習久。三密法水灑頂。許可傳法重度。猶且別学極底。加之。慈悲受性興隆餘身。又日三時供養法無絶。毎日三万念佛声不懈。物顕密事理行業。偏望往生浄土極楽。専祈臨終正念。過盛年殊更内心深発願念。參詣善光寺。其旨趣者。我毎日三万返念佛祈来迎引接。如来本願聖教證文無違。往生極楽無疑心。但釈迦遺法弟子源延若造上品往生可得無生法忍者。面容拜見本師如来。作此念已。自生年四十歳至于六十六。廿六年之間。毎年二度三度參詣善光寺如来御宝前。遂承久三年二月廿二日同廿四日両夜同預靈夢。如来宮殿佛

子自開。宮殿有聲言。汝祈何事乎。佛子答申。只臨終正念往生極樂也。宮殿有聲言。汝往生定上品。更不可疑。速發大悲。勸進一切。写我形像。可濟惡業衆生云々。于時五更枕上独落淚。年来念願成。面奉拜如。感應道交難思議。如何不堪喜悅。同此善光寺常住之僧三人一夜同蒙示現。（小字二行省略）其御詞言。我走湯山源延沙門欲被拜見。此沙門往昔因緣不淺。即拜見我摸形像可利益一切者也云々。早旦三人俱入堂額合語之。意詞一同也。仍一寺作貴寺内承諾。許淨蓮上人拜見訖。即諸衆相議自寺送書狀於上人。其比淨蓮上人相摸国西郡辺松田云所建立一寺祈往生号西明寺。善光寺使者尋行彼寺。折節駿河国智満寺為大曼荼羅供大阿闍梨得崛請渡給。仍使者即參彼寺。上人開善光寺書狀。捧目上置頂上秘泣。状旨不披露。而自其弟子同行弟子相模還之。独身參詣善光寺。無左右云何七日籠不動。常四日夜重如來告言。早上人可拜見我云云。此旨自他示現。仍承久三年辛巳三月二日出堂中諸人。閉四面門戸。淨定上人脂燭以直宮殿御前參詣。頭面作礼開御戸。面奉拜喜悅雨淚渴仰徹骨靜心思念。……」（頁一八七—一八八）

淨蓮上人源延の宗教的な行動の範囲は、伊豆走湯山寺を軸に大曼荼羅供の崛請に赴いた駿河国智満寺や相摸国西郡辺松田に建立した西明寺、さらに信州善光寺に及び、納富氏も指摘する味岡御房より伝授を受けた「信州平瀬法住寺」

（初期談義所に関して考察すべき寺院のひとつ）を加え極めて広範なものである。しかも僅かに伝存を確認し得た一群の智満寺旧藏聖教類の質の高さが端的に示すように、鎌倉初期の関東に展開した悉曇学・安然教学には看過しがたいものがあつたようである。この高い水準の学問環境から延びる教線の先には平安末期から鎌倉初期の「越州坂北豊原寺」（参考文献として保立道久氏「虎・鬼ヶ島と日本海海域史」〈『物語の中世 神話・説話・民話の歴史学』東京大学出版会 1998）等）が続いている。筑波大学図書館現藏天福二年写『悉曇要決』（十・二一・一）粘葉四帖は、「書本治承五年辛丑二月廿四日越州坂北於豊原寺書之」（卷一奥書）、「書本云治承五年歲次辛丑三月廿六日越州坂北豊原寺修行之書之了」（卷三奥書）とある如く、越前豊原寺において治承五年（一一八一）に書写された『悉曇要決』（その転写・通藏本か、とも）を底本としている。天福二年七月十七日から八月四日に智満寺（第二帖は「智満」を削り「走湯〔寺〕」と重書）別所興禪院（「走湯〔寺〕」は、おそらく豆州走湯山寺）において仁尊・信毫の手によって転写され、信毫（「信豪」とも）等によって校合されたことが解るものであり、駿州智満寺（別所興禪院）に存したことを示している。駿州智満寺や伊豆走湯山寺の学問的な水準も「越州坂北豊原寺」の悉曇学を継承して成立しているの

である。

中世において豊原寺で想起される書物がある。既に第一章で触れることのあった『受法用心鈔』(上下二巻)である。無住の『聖財集』中巻や広本『沙石集』巻八「不法ニシテ真言ノ罰ヲ蒙ル事」に見える「越前ノ誓願坊ノ上人」が著した邪法批判の書として周知のものである。「豊原寺誓願房記二巻書」とも言われることで明らかのように、越前国豊原寺の誓願坊であり、筑波大学蔵『悉曇要決』の本奥書に云う「越州坂北豊原寺」に同じ寺院であった、と思われる。平安末期の越前豊原寺における書写収蔵活動の旺盛なことは、わずかに残ることを得た片々たる聖教の余香を以てしても明らかであろう。

結び

越前に生まれ越前で仏法修行にはげんだ「田舎」の学僧が、三十七歳で上京し、以降の精励ぶりはめざましく、『受法用心鈔』に自ら語ることに偽りはないであろう。心定が『受法用心鈔』に語るところの学問的遍歴は、諸国から上京した鎌倉期の通世僧のひとつの典型を示すものである。越前の国内における諸流相承を経て、三十七歳で上京、三十九歳の建長五年に高野山の玄覚阿闍梨にしたがって教

相の秘書等を伝え、建長七年四十一歳で加茂空観上人如実(に)学び、岩清水の唯心上人の付法にあつては広沢の保寿院の流を尋ね聞き、などして一日として空しき日はない、というのである。心定自ら越前における相承修学を「田舎にての受法」(守山聖真氏の翻刻本文中に双行割書)と注記したかどうか不明であるが、上京以降の明徳知識に参じて諸流相承に差し障りなく精励しうる学問的水準の域に達していたとはいえるであろう。

おそらく鎌倉初期駿州の山寺智満寺にしても、源延の拠点とした伊豆走湯山寺や信州善光寺などと結び、都に優るとも劣らない人材を養成していたことは容易に想像がつく。駿州から円珠・思順に従って上京した空智房忍空の洛中金山院・南都郊外室生寺における瞠目すべき活躍を見ても明瞭であろう。円光上人良含も越州の産であった。

加茂空観上人如実・石清水唯心上人最盛などに付き諸流を受けた『受法用心鈔』の撰者心定は、無住や山本僧正覚済(『受法用心鈔』の序文撰者に比定される)にほぼ直結する学問的な環境にあった、と云ってもよい。無住も三十六歳で菩提山に登っている。心定もゆるやかな伝授相承を旨とした融合という新しい潮流の只中に奇しくも三十七歳の身で上京したのである。顕密・僧綱への批判と諸宗融合(但し、時衆などと現実的な対立が生じてくる)という新しい

思潮の渦の只中に、諸国（田舎）よりの真摯な求法者を懇ろに迎え入れる通世上人の姿勢がうかがわれるのである。如実や最盛・良合など、その後の仏教史が看過して久しい学僧たちの名は、枚挙に遑がない、といつてよい。

附記

既に竺沙雅章氏「宋元仏教における庵堂」〈『宋元佛教文化史研究』2000・8 汲古書院刊〉が「南宋末に著された天台宗の史籍、志磐『佛祖統紀』をみても、庵の名があらわれるのは宋代になってからである。」（頁396）と指摘し、山家派の総帥慈雲遵式も天聖のころに天竺靈山の寺東に日観庵を建て往生業を修した点などを指摘、天台僧・禅僧を問わず「豪民の庵に」招かれ居住する風のあったことを、宋代の僧伝に広く事例を拾っている。地方志にも探り宋代地方志には「勅額のない庵堂」の記録は少ないとして、『咸淳臨安志』の例を挙げている（寺院数762に対して庵は城内外あわせて13）が、元代以降に盛んになってくる、として多くの事例を示された。また、「大蔵経刊記にみえる庵堂」の一章を設け、南宋末から元代にかけて平江府陳湖の磧砂延聖院で開版された磧砂藏と元初の普寧寺で刊刻された普寧藏を取り上げて、庵の数を拾い、検討した結果を示された。磧砂藏刊記に認められる「庵」が八つ

に過ぎず、少ないのに対して普寧藏においてはその数が飛躍的に増えているのである。

以下に少ない事例ではあるが、東禅寺版補刻葉施財刊記にみえる「庵」「堂」を電覧した結果を加えたい。

大般若波羅蜜多經卷一四東禅寺版／

刻施⑦汀州連城縣後庵僧道深？捨⑦仲

大般若波羅蜜多經卷四〇東禅寺版／

刻施⑫汀州連城縣西隱庵主捨⑫仲

大般若波羅蜜多經卷八七東禅寺版／

刻施⑤汀州連城縣新福庵主廣洪捨⑤仲

大般若波羅蜜多經卷二六〇東禅寺版／

刻施④付高④湖州蒙山庵道圓為双親生界捨二片

大般若波羅蜜多經卷二七四東禅寺版／

刻施③汀州連城縣取資福庵契昌捨③仲

大般若波羅蜜多經卷五八〇東禅寺版／

刻施②青②住廣州悟明堂道成為妣李念五娘捨

大般若波羅蜜多經卷三二七東禅寺版／

刻施⑩王良⑩廣州居住悟明堂道成為妣李念五娘捨

大般若波羅蜜多經卷一六二東禅寺版／

刻施⑧周文⑧廣州壅菜堂道人陳氏七娘為自身捨

大般若波羅蜜多經卷五八九東禅寺版／

①大般若經第十三会忍波羅蜜多分序刻施

②江靖刀②住廣州清本堂本聡捨
「壅菜堂道人」とは、「壅菜堂」居住の「道人」である。竺
沙雅章氏「浙西の道民について」(『中国佛教社会史研究』
1982 同朋舎刊) 参照。

なお、道人(者)については、『徒然草』などに少な
らぬ用例をみる。

本稿は、平成23年8月29日に開催された軍記・語り物研
究会大会のシンポジウム「軍記物語と東アジアの仏教世界」
における発表資料の一部にその後の調査資料を補い原稿化
したものである。本誌80・81号所載稿並びに『軍記と語り
物』48号所載稿ほか、関連する拙論をご参照いただければ
幸いである。

最後に資料調査に際しまして貴重な典籍の熟覧・調査に
ご高配を賜りました身延文庫当局に対し厚く御礼を申し上
げます。

この度の本稿も平成24年度科学研究費(基盤研究B・課
題番号22320052)の調査研究費助成による成果である。

(まきのかずお・実践女子大学教授)